



サイエントロジー： 真正な宗教

ウルバノ・アロンソ・ギャラン
哲学・神学教授
グレゴリウス大学
ローマ、聖ボナベンチュール、法王学部
1996年6月

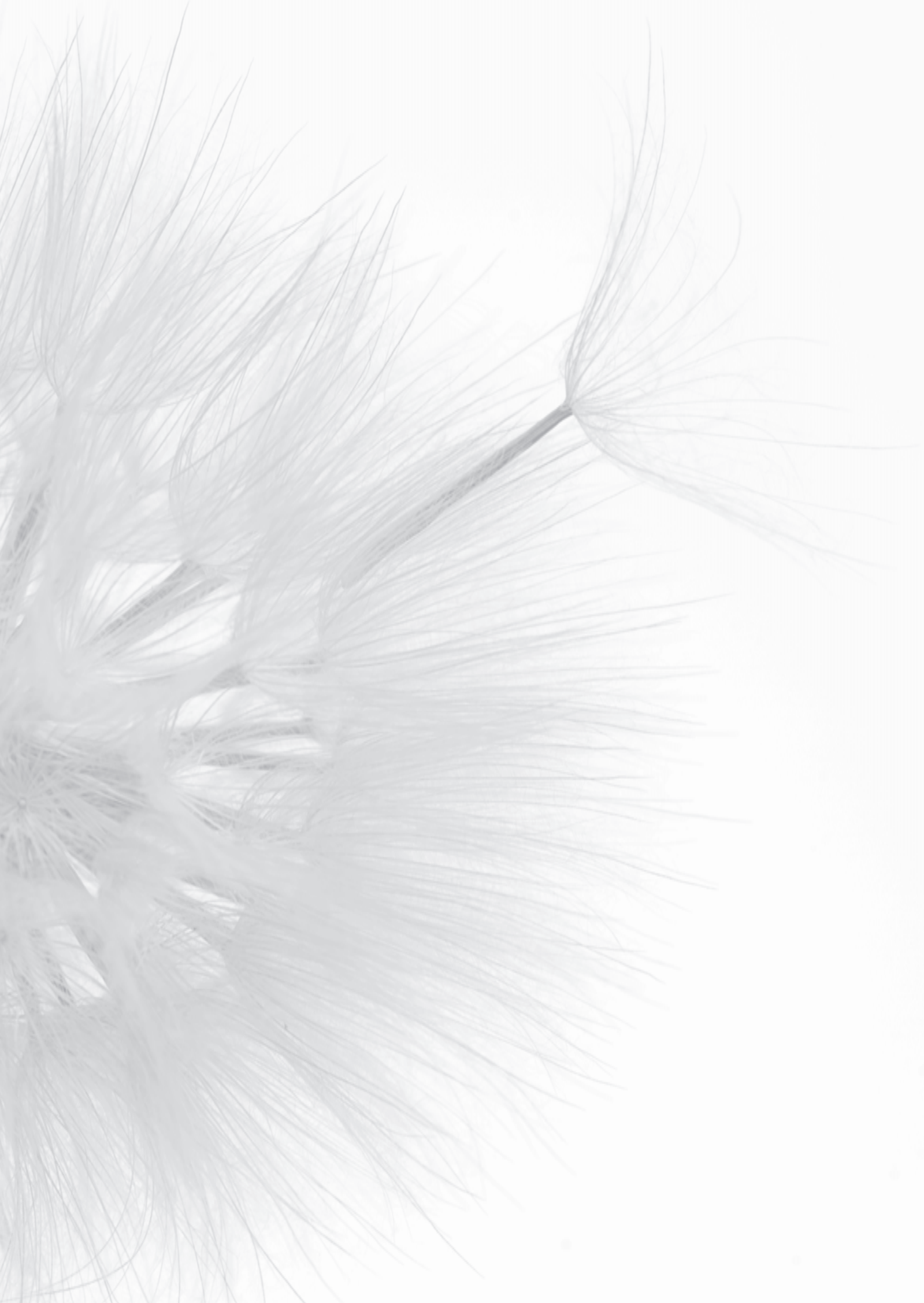


サイエントロジー： 真正な宗教

サイエントロジー：
真正な宗教

目次

I. 序説	1
II. 宗教的概念	1
III. 哲学のおよび教義上の観点	3
IV. 儀式的および神秘的観点	7
V. 組織的観点	7
VI. サイエントロジーの最終目標	9
VII. サイエントロジーは宗教なのか？	9
著者について	12



ウルバノ・アロンソ・ギャラン
哲学・神学教授
グレゴリウス大学
ローマ、聖ボナベンチュール、法王学部
1996年6月

サイエントロジー： 真正な宗教

I. 序説

ここ数年の間、サイエントロジーに関する論争がヨーロッパ、特にドイツで起こっているのだが、その論争はこの宗教団体の本当の社会的な意志を誤解しているように思われる。

哲学および宗教の知識がある者からみると、サイエントロジーに対して論争の余地はない。だが、総合的な宗教的現象の知識や、宗教的現象のさまざまな形での顕現に対する知識がないと、不当にも敵対的で非妥協的な態度にさらされてしまうことは想像に難くない。

このような理由で、私はサイエントロジーの宗教に対する結論をこの論文にまとめ、発表することにした。サイエントロジーは、私が何年もの間研究してきた宗教である。研究は、形式的な面（文献、書籍そして哲学）と、より日常的な面（儀式、内部および外部組織、宗教的慣習の観察、そして共同体活動）から、またわが国イタリアだけでなく、他の国（フランスとデンマーク）に対しても行った。

II. 宗教的概念

宗教を定義し、他の形式の信仰やイデオロギー、社会的団体から区別する客観的な特徴を分析しようとする時、神学的なものはそれほど役に立たない。

そのため、必要なのは概念と現代の原理を用いることである。これらによって、私たちは宗教的現象についての科学的な見解を持つことができる。しかし、宗教とは精神の個人的そして内面的な経験で

あり、そのようなものとして社会科学で一般的に行われている、いくつかの論争を回避できるということをおぼろげに忘れるべきではない。

この寛大で宗教間の対話を用いた取り組みは、現在私たちが生きている社会において、挑戦的ではあっても不可欠とされていることである。このことは、レナード・ボフ (Lenard Boff) やハンス・カン (Hans Kang) のような名高い神学者たちが強調している。

「宗教」という言葉 (由来はラテン語の *re-ligare*、統合または再統合を意味する) が、信仰や慣習、また崇拜の形式によって統合された人々の共同体と定義されているように、宗教自体もそのように考慮されるべきであろう。言うまでもなく、その共同体は「神」への探求によって統合され、人生の問題への直面の仕方によって定義されるべきである。このことから、宗教の歴史の中で「神聖なるもの」の体験やそれとの個人的接触について多くが語られている。

人間の尊厳という高尚な概念や「神聖」と呼ばれる何かを知り、認識することは、キリスト教に限らずすべての宗教の真髄である。このことは、宗教信仰とその純粋さに関係する『*Dignitatis Humanae*』という資料において第2回バチカン公会議によって認識されている。

言葉の点では「神」の概念はないのだが、実際には「神聖なるもの」を尊敬し崇拝している仏教やジャイナ教のような、その他の宗教現象がある。その「神聖なるもの」は、総括的な要素であり、キリスト教徒、イスラム教徒、ユダヤ教徒の「ある特定の神」よりももっと幅の広い特徴がある。

自分自身の経験だけに基づいて他の特性を排除してしまう宗教観念を持つことは、宗教的自由の最も基本的な試金石を侵す根本主義にほかならない。

マックス・ミュラー (Max Muller) は「一つの宗教しか知らない人は何も知らない」と断言している。これは、まったく正確に的を射ている。デュルクハイム (Durkheim) は、この現象の鍵を次のように述べている。「宗教とは普遍的な現象であり、知りうる限りのすべての人間社会に現れている。」

未知のものを定義するのに既知の型を使うことは一般的なことである。これは多くの事例で、社会を調査する者によって繰り返されてきた手順である。しかし、比較による分析を濫用すると、基準となる行動や信念や経験に直面した時には、間違いなく何も見えなくなってしまう。それらは、他の要因や類似性をなおざりにしない限り説明できない。

宗教とは明らかに、人間に生まれながらにして存在する「無限」を捉えようとする魂による探求である。それは、無限への願望を感じている満たされない人間の希望であり追求である。このように、宗教とは、人間の存在を構成するものにほかならず「無限者と意思疎通をはかる」ために、絶対的

に必要なものとして個人が意識しているものである。宗教は人間を支えるものであり、それによって人間がいろいろな面で頼ることのできる源である。このことは人類学的分析によって明確に証明されている。その分析では、際立った宗教的信条とその欠如は、学者にとって、社会における社会的および個人的行動基準を理解するための決定的な要因である。

サイエントロジーのような宗教を理解するためには、現代のサイエントロジーの専門家たちが指摘しているような、大変幅の広い観点から評価する必要がある（参照：ブライアン・ウィルソン著「The Social Dimension of Secretarianism」1990年およびアイリーン・バーカー著「New Religious Movements: A Perspective to Understand Society」1990年）。いくつかの可能性のある取り組みの中で、以下に列挙したような観点に基づいた客観的で科学的な取り組みを選んでみた。

1. **哲学的小よび教義上の観点**：この中には、完全なまとまりとしての信条、教典および教義が含まれる。これらには、宗教的知識の3つの基本的役割である、最高の存在、人間、そして人生がある。
2. **儀式的観点**：これには、サイエントロジストが経験する宗教的現象に応用された式典、儀式、そして宗教的実践のすべてが含まれる。
3. **全世界的、組織的観点**：これはとても大切な見解である。すでに完全に作り上げられ進化したものによって、宗教と信条の間に一線を引き、区別して定義するからである。
4. **目的または最終目的からの観点**：サイエントロジーが信者を目的へと導くため、人生の目的および精神的目標の最終達成を明確に表わすものである。

III. 哲学的小よび教義上の観点

サイエントロジーは、L. ロン ハバードの著書に基づいている。サイエントロジストは、その創設者、哲学者、人道主義者であるハバードの作品と研究を、サイエントロジーの教典の唯一の源だと認識している。

ダイアネティックス（参照：『ダイアネティックス：心の健康のための現代科学』1950年）から始まったサイエントロジーの進化は、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教、そして仏教に非常に類似している。その歴史は、一步一步進化し完全なる教義の建設に導く基本的な「哲学的真実」の体系的な「黙示」であり、発見の一つである。

ハバードは、ダイアネティックスによって、心が身体や人生に対して生み出す苦しみから人間を解放しようとした。

何年もの間、ダイアネティックスは、信者がクリアーの状態に到達するための道具として用いられてきた。その本が定義しているところによると、この状態は、不必要な苦しみから解放される重要な進歩を意味し、人間がよりよく自分の精神性（セイタンと呼ばれる）を体験できる状態にまで人間を上昇させるのである。このことを深く分析してみると、神秘的体験である涅槃や他のほとんどの宗教で描かれているような精神状態は、サイエントロジストがクリアーの状態として求めている精神状態とまさに同じものなのであると言えるだろう。

後ほどハバードは、クリアーをすでに達成したと言う多くの人々の意見を研究した時に、あることを発見した。それは、精神的実体が存在するという明らかな証拠があり、さらに人間自体が精神的存在であり、不滅であり、また輪廻（生、肉体の死、そして新しい生）の苦しみと経験によって失われていた多大な可能性を持っているということである。

この輪廻から人間（セイタン）を解放して完全な認識や精神的自由を取り戻させる精神的技術をハバードは開発した。このようにして、彼は精神的カウンセリング（オーディティングと呼ばれる）という理論と実践を発展させた。それによって、OTレベル（OT：機能しているセイタン。つまり、身体の中にいなければならないという衝動がなく、また身体がなくても機能できることを指す）と呼ばれる最高の状態に、認識と存在を導くことができるのである。

これらのことすべては、完全なる自由への道（The Bridge）の中で概略されたわかりやすい順序で解説されている。その教義全般に、人生や神、そして他の宇宙との関係（物理的または物質宇宙と、精神的またはセータ宇宙）が強調されているのと同様に、その存在自体の知識を持つことも強調されていることは、重要視されるべきである。

このことから、信条は精神救済までの道における二つの基本的なサイエントロジストの活動を挙げている。一つは、サイエントロジーの教典（トレーニング）による真の人生の研究である。もうひとつは、セイタンが自分らしく行動するのを妨げてしまうような、また他人と自分自身の両方に対して害を成す分別のない態度を取ってしまうような、逸脱や負担からの解放（オーディティング）である。（参照：「サイエントロジーとは何ですか？」）

サイエントロジー教会の聖職者たちのために書かれた膨大な技術書はさておき、サイエントロジーの信者に向けた広範にわたる資料や参考図書目録がある。特に重要で、サイエントロジーの基本的な真実を記述したものを以下に挙げておこう。

『サイエントロジー：思考の原理』

『サイエントロジー 0-8』

『サイエントロジー 8-8008』

『サイエントロジー:人間の歴史』

『ダイアナティックス 55 !』

『サイエントロジー:人生への新しい視点』

『生存の科学』

『サイエントロジー・ハンドブック』

基本的な見解として、サイエントロジストは自分たちの宗教を「人間がより自分自身と人生について知ることができる『応用宗教哲学』である」と定義している。(Technical Dictionary of Dianectics and Scientology)

L. ロン ハバードは人生を 8 つの基本的顕現に分けている。それぞれの基本的顕現とは人間の生存への衝動であり、向上という目標に向かっている人間の生命力である。これらは生命の強い衝動(ダイナミック)であるため、ハバードは「8 つのダイナミックス」と呼んでいる。

第 1 のダイナミックは、個人が個人として生存していこうとする衝動である。

第 2 のダイナミックは、性的な意味、それは夫婦、家族、また子供を育て教育していくことで生存しようとする衝動である。

第 3 のダイナミックは、個人が一部分をなしているもの(友人、ビジネス、クラブ、国、人種)を含む団体または団体として生存しようとする衝動である。

第 4 のダイナミックは、人類または人類として生存しようとする衝動である。

第 5 のダイナミックは、生命を持つ種(動物、植物)への、または生命体として生存しようとする衝動である。

第 6 のダイナミックは、物質宇宙に対する、または物質宇宙として生存しようとする衝動である。

第7のダイナミックは、精神的存在群に対する、または精神的存在として生存しようとする衝動である。

第8のダイナミックは、無限の存在に対する、または無限の一部として生存しようとする衝動である。これは至高の存在、つまりサイエントロジストにとって神のダイナミックである。

これら人生に関する8つの表現には、個人が精神的に前進し、そしてダイナミックスを害さない倫理的行動を維持しながら、精神的向上を達成しなければならない領域が含まれる。サイエントロジは善と悪を、ダイナミックスに与える利益または害の要因であると定義している。完全な善とはすべてのダイナミックスを助けるものであり、完全な悪とは、すべてのダイナミックスを害するものであろう。もちろん、すべてのダイナミックスは同じレベルの重要性を持っていることを考慮し、多かれ少なかれいくつかのダイナミックスに利益または害を与えるという度合いに対する、傾斜尺度の上に存在している善と悪の中間点はあるだろう。(参照:『サイエントロジ・エシックス入門』)

倫理や道徳の見地に関することは、サイエントロジの教義の中で最も重要なものである。さまざまな参考図書で、この概念は数えきれないほど多く触れられている。この主題だけを取り扱った出版物も多くある。例えば私がすでに触れたものや『しあわせへの道』などである。(参照:『プリ・クリアーのためのハンドブック』)

サイエントロジストにとって、人間とは精神的で不滅の存在であることから判断すると、それぞれ違うひとつひとつの人生における行動は非常に重要になってくる。それはその人自身のダイナミックへの利益だけではなく、完全なる精神的向上を達成することができるようになるためである。「私たちがこの世界にいるのは、自分たち自身の救済を見つけるためである」とは「サイエントロジへの誘い」というビデオの中のハーバードの言葉である。

サイエントロジストたちは、トレーニングと精神的カウンセリング(オーディティング)の両方から真の向上や精神的自由を経験したと宣言する。彼らは自分たちの「勝利(wins)」を、質量、争い、無知、そして不必要な心構えおよび感情からの本当の解放だと言う。彼らは、自分たちの能力は増大し、知覚力は向上し、そして自分自身、人生、また神についての新しい知識を得たと感じている。

「サイエントロジ教会の信条」は、信者を人生の最終的な意味へと統合する信仰体系を明確に記述している。この信条は、人間の尊厳や、決して侵されることのない、否定されることのない権利を強調している。それはまた、人間は生まれながらにしてみな兄弟であることを明記し、また、無限(神だけが人間の自由と英知に対して行動を取る「権利」があるもの)を目指す人間の精神的な本質を認識している。

この信条は、サイエントロジストたちがその中で伝えている、精神の救済を達成するための手段として、オーディティングおよびトレーニングを実践するというはっきりとした目的を与えている。

IV. 儀式的および神秘的観点

この章で触れられる実践の部分はすでに前章で言及したため（トレーニングとオーディティング）、式典と儀式として理解されるものの方に集中したい。

それらは「*The Book of Ceremonies of the Church of Scientology*」にまとめられている。サイエントロジーの創設者はその宗教を仏教およびヴェーダの後継者、つまり東洋宗教の伝統を受け継ぐものとして位置付けている。しかしこの事実にもかかわらず、サイエントロジーは多分に西洋宗教を連想させるような儀式がある。日曜礼拝や結婚式がその事例である。

しかしその伝統により、サイエントロジーは、多種多様でとても個人的な儀式を持っている。それらは、ユダヤ-キリスト教宗派を思い出させるのだが、サイエントロジーの信条と決して矛盾していないということがわかる。命名式、命名および認知式、そして葬式などがある。サイエントロジストは、セイタンの永遠性の信仰に従って、新しく誕生した身体に名を与え、新しい身体とその家族の存在を歓迎し、また新しい身体を探すためにその身体を捨てた存在に別れを告げるために、そして自分自身を探す新しい状況の中に彼が適応できるよう手助けをするために、これらの儀式を行うのである。

これらすべての儀式は、任命された聖職者の援助の下で、または教会礼拝堂の聖職者、そして定期的に積極的な参加をしているサイエントロジストたちの共同体メンバーたちによって行われる。

V. 組織的観点

サイエントロジー教会が地位や大きさによってさまざまな名前を持つ多様な教会で構成されているのは世界共通である。

一番下の階層にはサイエントロジーやダイアネティックスの基礎となるグループとミッションがある。それらは、サイエントロジストたちの最小単位の共同体であり、ひとりまたは複数の任命された聖職者によって指揮される。聖職者は、オーディティングや宗教的儀式という基本的なサービスを与え、またサイエントロジーの教義を共に勉強する。ミッションは、共同体としては一番下の階層のものである。彼らは聖職者を任命することもつくることもできないし、OT（機能しているセイタン [Operating Thetan]）レベルの宗教的オーディティング・サービスにも仕えることができない。

次の階層にはサイエントロジー教会がある。これらは聖職者たちを生み出し、任命することができる。そしてクリアーのレベルまでのオーディティングを与える。

その上の階層には上級教会がある。これらは、最高位の聖職者たちを養成し、そしていくつかのOTレベルの聖職者カウンセリングを与えるのである。

フロリダ州クリアウォーターにあるサイエントロジー教会フラッグ・サービス組織は、すべての上級組織の中で一番上級の組織である。そこでは人々を最高の聖職者レベルにまで養成する。そしてサイエントロジストは、最高のOTレベルに昇格するためにそこへ行くのである。

カリブ海を航行する、フリーウィンズ号で運営されるサイエントロジー教会は例外である。そこは他のどの教会でも授かることのできない特別なOTレベルを与えている。

すべてのセンターにおいてさまざまなレベルの聖職者たちを用意できるわけではなく、中央機関（ローマ、チベット、エルサレム、メッカ）でのみ用意できるような宗教について言えば、この形式の宗教サービスの構造は、そのような宗教のほとんどに共通している。そこは、牧師、修道士、司祭たちが最高レベルの聖職を叙任することができる場所なのである。

サイエントロジーの宗教的共同体では、聖職者や宗教家たちは共同体内に住み、教会の目的にすべてを捧げて、世俗の妨害や空虚さを放棄しながら、聖職者と信者の真の共同体を形成している。

創設者が運営していた船に乗船していた乗組員によって名づけられたシー・オーガニゼーションには、さまざまな機能を実行する主要な場所が世界に5つある（サイエントロジーが普及している国の多くで、聖職者や信者たちのグループが存在するが）。これら5つの本部は、イギリスのイーストグリンステッド、ロサンゼルス、フロリダ州クリアウォーター、デンマークのコペンハーゲン、そしてオーストラリアのシドニーである。これら5つの本部では、他のどこよりも伝道的で聖職者としての任務に捧げている真の共同体精神を感じることができるだろう。サイエントロジーの聖職者たちは独身でなければならないという義務はないのだが、機能的または献身的な面では、これらの共同体はカトリックを含むその他多くの宗教のそれに似ている。シー・オーガニゼーションの会員たちは、かなり厳しいメンバー規範に従っているのである。それには、非常に倫理的で一夫一妻の性的関係、すべての薬物（ドラッグ）の使用禁止、宗教の最終目標を達成するために人生のすべてを捧げることが含まれる。

もちろん、最高レベルの聖職者たちのトレーニング、最高レベルのOTへと向かうオーディティング、最高レベルの組織の職務、そして国際的なレベルのサイエントロジーの倫理レベルに対する責任は、このシー・オーガニゼーション（Sea Organization）と呼ばれる宗教団体に委ねられている。彼らは任務に対して身を捧げているのである。

VI. サイエントロジーの最終目標

L. ロンハバードの言葉を引用すると、サイエントロジーが最終目標とし目指しているのは、「狂気もなく、犯罪もなく、戦争もない、そこでは能力のある者が栄え、正直な者が権利を有することができ、人間が自由により高い境地に至ることのできる文明」である。(参照:「サイエントロジーとは何ですか?」)

サイエントロジーは、個人の目標として、人間の救済、精神の解放、そして人間にのしかかってきた障害からの自由を追求している。しかしながら、社会が自由にならなければ、誰ひとりとして自由にはなれない。責任への探求が、サイエントロジストたちが自分たちの自由を探し求めるために通る本道なのである。責任とは、よりよい最終目標を達成する前に、我々の生、および人類の生の向上を欲するものである。

そのような幅の広い最終目標は、ただ信者が行う聖職的任務を通してだけでは達成されない。そういった理由で、国際サイエントロジー教会は、これらの目標を掲げた社会的キャンペーンを行うさまざまな団体や組織を設立した。その中の一つには、エイブル(「ABLE」生活教育向上協会)がある。これはコミュニティ内でのいくつかの救済計画を支援している。例えばナルコノンは、薬物に関する分野で薬物使用の防止および社会復帰を計画する。クリミノンは、さまざまな国において犯罪者に対して教育および社会復帰を計画する。アプライド・スカラスティックス (Applied Scholastics) は、非先進諸国やその近隣国で、教育と読み書き能力向上のキャンペーンを計画する。そして、しあわせへの道財団 (The Way to Happiness Foundation) は、ハバードの著書『しあわせへの道』に基づいて、幼児や思春期の子供と一緒に、環境保護計画、勉強計画、民間援助計画などの、共同生活体を救済するための行動規範を再構築するキャンペーンを展開するものである。

サイエントロジー教会が設立したもう一つの重要な団体は、市民の人権擁護の会 (CCHR) である。この団体は、精神衛生の分野での調査や摘発で、国際的な賞を受けている。

特別重要なものには、ボランティア聖職者協会 (VM) がある。これは世界中のサイエントロジストたちで構成されている。彼らは助けが必要な事故、自然災害、または悲劇的な出来事が起こった時に、専門家やその分野の権威とともに働いている。ボランティアたちは、医師団や民間防衛団が行動を起こす間に、人々に慰安と応急処置を与えるように完璧に訓練されているのである。

VII. サイエントロジーは宗教なのか?

神学者および哲学者としての、またサイエントロジーの書物と実践を研究したものとしての私の見解は、サイエントロジーはあらゆる意味で宗教である、と断言できる。

サイエントロジー宗教をその信仰と実践の点で研究する時に会うものは、無限で神聖なるものを探し求め、神との適切な関係における人間を見つけるという、複合された信仰で統合された人々の共同体である。

精神的な存在に対する特定の儀式にかかわる要因について知らなければ、どんな宗教も理解できないであろう。ザビエル・ズビーリ (Xabier Zubiri) によって語られたように、生存や救済という事実は、どんな宗教的経験の中でも本来備わっている教義であるのだが、サイエントロジーは特にそれを新たにするものである。神に結びついていようと、または神を信じていなくとも、この経験による認識を変えることは一切ないのである。しかし、サイエントロジーの場合は、これに当てはまらない。サイエントロジストは神を崇めることはないのだが、8つのダイナミックスの中で神や無限なるものへの探求に確信がある。実際にイスラムからカトリック信仰をほとんど引き離してしまった非難のひとつには、後者、言わばイスラム教徒たちは、その継続的な改革で偶像崇拜に夢中になった自分たちの宗教を、そのままにしておいたことが挙げられる。

サイエントロジーの原点となる宗教 (仏教やヴェーダ) がすでに指摘しているように、自分自身の完全な知識を通じてのみ、神を知り、愛することができるのである。

世界教会主義者が主張するように、宗教とは普遍的な衝動であるため、忘れてはならないのは、カトリック信仰自体が形成までの長い段階を経て絶え間ない危機と再形成を経験し、今日私たちが知っているような「最終的な形」を取り入れたことである。イスラム教、ユダヤ教、仏教も同じような段階を経て、サイエントロジーが完全に組織された形や観点を体系化しなければならなかった数年よりも、もっと長い時を経てきたのである。

すべての人間性を否定する心理学や精神医学の科学的な教義と、サイエントロジーとの明らかな対決は、サイエントロジーが断言するように、この宗教からより多くの困惑を取り除き、人間の精神的本質、性善性、永遠性、そして無限なるものへの探求のみを最終目標として価値を置くのである。ここでのその斬新さは、その創設者がサイエントロジー宗教を、人間をこの目標に向かわせる知識と実践の団体として、発展させたことであろう。これを「治療」や「治癒」の試みと混同するのは、下手に書類化された意見の浅はかさに惑わされているのである。

完全かつ正真正銘の宗教だけが、これらの考えを確認、維持することができ、信条、教義、実践、儀式、形態、そして精神の救済に向けられた目標を創造していく。これは、宗教そのものの一部であり、そして、サイエントロジーは宗教なのである。

行政上、法律上、また税に関係する考察を除いて、サイエントロジーはどんな宗教でも求められる要求をすべて満たしている、と私は再び断言する。

サイエントロジーは、真の宗教的本質を備えており、人間の精神的本質を扱った目標だけを追求しているのである。

ウルバノ・アロンソ・ギャラン

著者について

哲学および神学教授であるアロンソ教授は、ローマのグレゴリオ大学、および、ローマの聖ボナベンチュール法王学部から学位を受けました。教授は、ローマ教皇政府の指揮による世界宗教主義議会の仲裁者であり、この地位でヨハネ十三世ローマ法王、そしてパウロ四世ローマ法王とともに働いた経験があります。